

就職活動におけるボランティア活動に関する研究  
——教員採用試験における大学生の学校支援ボランティアに焦点を当てて——  
A study on volunteer activity in the job hunting  
——Focus on the school support volunteer of university students  
in the teacher employment examination——  
西脇 央 (教育学領域)

## 1. はじめに

愛知教育大学で、キャリア支援センター主催の教員採用試験の面接対策講座を受講した学生の話の聞いていると「ボランティア活動」を使い、志望動機や自己PRしている者が多い。学生と話をしていると、「教員採用試験でボランティア活動が聞かれるから一日だけボランティアをした」と言う学生や、また、名古屋市の教育委員会が主催する「なごや教師養成塾」ように、「教師塾」に一定期間参加することで、教員採用試験の一次試験の教養試験が免除になることから「ボランティア活動」に参加する学生もいる。

また、平成 27 年度愛媛県の願書では、受験生に対してただ、ボランティア活動を記入させるだけでなく、1～9 まで分類されたボランティア活動内容にレ印を付け、その活動時期と活動内容を書くように指示している。ひとつの事例ではあるが、教員採用試験において、ボランティア活動が受験者を判断するために重要な材料になっていることがうかがえよう。

ところで、ボランティアの定義の 1 つとされるのが「社会性」である。「社会性」は「奉仕性」という言葉でも説明され、『奉仕』において強調されているのは、『他人のために』という『利他性』である(中山 2006, p.148)。しかし、現在のボランティアを取り巻く状況は複雑になってきており、ボランティアの特徴である「利他性」だけでは説明できないほど多様化している。特に大学生においては、「ボランティア活動は『利己的な動機:52.3%』が半数以上を占め」(柴田他 2004, p.129)、ボランティアは自分のためにやるものだというイメージが顕著である。「その中でも『自分の役に立つと思ったから:18.7%』の自己向上的な動機や『就職などで有利になるようにしたいから:15.0%』の手段的な動機を持つ人が多数を占めている」(柴田他 2004, p.129)。

簡潔にいうと、1995 年 1 月の阪神淡路大震災でのボランティアの活躍が注目され、「ボランティア元年」とも呼ばれた年から 20 年、「利他性」を 1 つの特徴するボランティア活動が大学生において、利己的な動機、言い換えれば、「自分のため」、特に教員採用試験を有利に働かせる手段として使われているのではないだろうか。

以上の関心から本論文では、ボランティア活動が教員採用試験という就職活動を介することで、「誰かのため」のボランティア活動から「自分のため」のボランティア活動になっているのではないかという点を明らかにしようとするものである。

## 2. 論文構成

序章 はじめに

### 第 1 章 大学生の教員採用試験における「ボランティア活動」について

第 1 節 教員採用試験の採用状況とボランティア活動の関係性

第 2 節 先行研究の整理

第 3 節 分析の観点と資料

### 第 2 章 「ボランティア」理念の崩壊と採用試験のための「ボランティア」の登場

第 1 節 「奉仕性」の理念の崩壊

第 2 節 学校支援ボランティアとは

第 3 節 採用側からみるボランティア活動

### 第 3 章 「教員養成セミナー」におけるボランティア活動の分析

第 1 節 教えることに焦点が当てられた「ボランティア活動」の登場(1995～1999)

第 2 節 ネット作りのための「ボランティア活動」の定着(2000～2010)

第 3 節 教師として生かす「ボランティア活動」への発展(2011～2014)

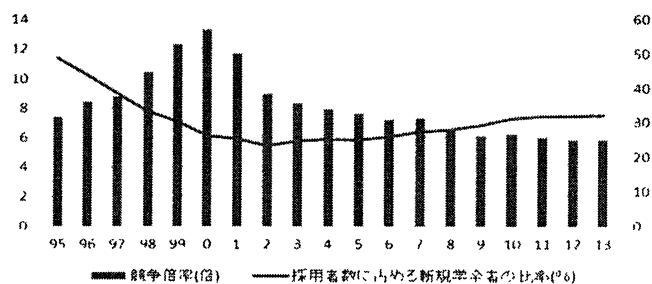
## 終章 まとめ

### 3. 大学生の教員採用試験における「ボランティア活動」について

#### 3-1. 教員採用試験の採用状況とボランティア活動の関係性

1991 年に 4.2 倍だった教員採用試験の競争倍率(文部科学省調べ)が「バブル経済の崩壊」を契機に、2000 年には、13.3 倍に急激に上昇したものの、2001 年から徐々に減少し、2013 年現在においては 5.8 倍の競争倍率で推移している。一方で、採用者数に占める新規学卒者の比率の推移は 1994 年から下がり始め、1995 年には 48.8%であったが、2002 年には 23.3%にまで減少し、競争倍率が減少した 2013 年においても 32.2%という低い比率で推移し続けている。(表 1 参照)。

表1 教員採用試験の競争倍率と新規学卒者の比率



文部科学省、『教育委員会月報』no.546~no.774(1995. 11~2014. 3)。

こうした教員採用試験の競争倍率の低下に関わらず、採用者数に占める新規学卒者の比率は少ないままである。現役の大学生にとって厳しい採用状況が続くこの時期、1996年に教員採用等に関する調査研究会議から発表された、教員採用等の改善について「審議のまとめ」を発端に、従来の筆記試験重視から人物重視の選考方法へと見直しが進められた。選考方法の多様化・多元化など採用試験の形態は大きく変容したのである。具体的には、新規学卒者と教職経験、民間経験を有するものそれぞれに応じた選考方法の導入や、各県から「求める教師像」の提示、1次試験から面接の実施、集団討論・集団面接・個人面接・模擬授業など異なる様々な面接形式等々である。

このような、「バブル経済の崩壊」を契機に教員採用試験が変容している1つの形態に教員採用試験のためにしなければならない「ボランティア活動」の定着がある。2006年に行われた総務省の社会基本調査の「ボランティア活動に関する意識と年齢階級別行動者率」によれば、2001年の28.9%から2005年の26.2%になり、ボランティアの行動者率は減っている。しかし、ボランティア経験のある大学生は、1997年の40.7%から2005年の65.2%に増加していることが、2006年に行われた独立行政法人日本学生支援機構の「学生ボランティア活動に関する調査報告書」からも分かる。この結果からも、「ボランティア活動」の定着が読みとれる。

「ボランティア活動」におけるボランティアの定義は一樣ではないが、定義のひとつとされるのが前述のとおり「利他性」である。その「利他性」にも関わらず、実際の大学生のボランティア活動は「他人のために」というよりもむしろ「自分のために」にボランティア活動をしている。教員採用試験における「ボランティア活動」は、採用状況の悪化から、ボランティアの「利他性」の意味から大きく離れた状況で定着していると推察される。

### 3-2. 分析の観点

教員採用試験における「ボランティア活動」を検討し

ていくにあたり、「ネタ作りためのボランティア活動」という観点に着目したい。教員採用試験に合格するために、面接や論作文での説得力をまずネタ作りとして、「ボランティア活動」をしているということである。このように考えることで、ボランティア活動の定着を単に、教員採用試験における採用状況の悪化した結果とみるだけでなく、面接や論作文で有利になるための手段として観察することが可能となる。また、教員採用試験の面接官や、教育委員会の求めているボランティア活動とは違う形で、ボランティア活動が進められているということも考えることが出来る。そのため、以上の関心から、本論文ではネタ作りのための「ボランティア活動」という視点から分析を進める。

### 3-3. 検討の素材

検討にあたっては「教員養成セミナー」という雑誌を使用する。

まず、「教員養成セミナー」を選んだ基準について説明する。「教員養成セミナー」は、時事通信出版局から出版される月刊誌である。選んだ基準として、3つ挙げられる。第1に、教員採用試験対策突破を目指す学生向けの雑誌であるということがある。本論文は大学生を対象としているため、学生向けに書かれている必要がある。第2に、教員採用試験を特集している雑誌において、一番、読者が多いことが挙げられる。Amazonの売り上げランキング(Amazon 学校教育雑誌, 2015.1.30 閲覧)でも、学校教育雑誌のカテゴリーで売上2位を記録し、教員採用試験の雑誌として知られる協同出版「教職課程」の売上4位を上回っている。このことから、より多くの学生の目につく可能性が高い。第3に、筆者自身も教員採用試験を受けるにあたり、愛読していたということもある。筆者自身が読んでいたことで、教員採用試験を受ける学生は、どの部分を中心に読んでいくのかを知った上で調べることができるからである。

次に、「教員養成セミナー」の性質について説明する。「教員養成セミナー」の3つの特徴からなる。教員養成セミナーのホームページによると、1つ目に、「特集」として、教育現場の様子や重要課題を取り上げ、教師になる上で、知るべきテーマを示している。2つ目に、「情報編」として、全国の教員採用試験に関する情報に加えて、「学力」や「児童・生徒の問題行動」などに関する調査の結果を取り上げている。3つ目に、「学習編」として、教員採用試験で出題される教職教養・一般教養の重要事項を中心に取り上げている(時事通信出版局 教員養成セミナー, 2015.1.30 閲覧)。

### 4. 検討の結果

#### 4-1. 教えることに焦点が当てられた「ボランティア活動」の登場(1995~1999)

まず、1995年から1999年は、教えることに焦点が当

てられた「ボランティア活動」が登場している。この時期は、「自分のため」よりもむしろ、子どもたちのため、「他人のため」にボランティア活動が求められている。

最近、一部の都道府県で、ボランティアなど社会奉仕の活動状況を高校入学者の選抜の資料として採用する傾向がある。ボランティア活動は、阪神・淡路大震災で一層私たちに身近な話題となったので、論作文の出題テーマとしても注意が必要である。社会奉仕活動の大切さを教えることの意義は今後ますます重視されるがそれに従って、その活動の意義や経験の有無を尋ねられる傾向も強まるだろう(教員養成セミナー 1995, 8, p.86-87)。

つまり、阪神淡路大震災をきっかけに、ボランティア活動が注目されるようになり、子どもたちに「社会奉仕活動」の重要性を教えなければならなくなったため、ボランティア活動をするということなのである。

他方、「教員養成セミナー」の中に載せられている合格体験記では、子どもたちにボランティア活動を教えるためというよりもむしろ、ボランティア活動に行き、評価されたことに注目が集まっている。

私が一番アピールしたのは、一所懸命部活をやったことなのですが、それから阪神淡路大震災で一週間ほどボランティアに行ったことについて、かなり詳しく話を聞かれました。面接官には、積極性が評価されたんじゃないかと思います(教員養成セミナー 1996, 2, p.46)。

その理由として、1996年に教員採用試験における「人物重視」への転換がなされたことがある。「人物重視」によって、教員の資質の向上が強く求められ、ボランティア活動が評価されるようになったのである。

#### 4-2. ネタ作りのための「ボランティア活動」の定着(2000～2010)

2000年からは、ネタ作りのための「ボランティア活動」が定着するようになる。「ネタ」とは、ボランティア活動の体験をまとめ、面接・論作文の説得力を増す「材料」として使うという意味である。そして、あらかじめ体験をまとめておくことで、教員としての資質が向上していることをアピールするのである。1年ごとに、「素材」「ネタ」「面接ノート」などのように言葉は変わっていくものの、いかに体験をまとめて、面接や論作文の「ネタ」として、教員採用試験に利用していくかという言説が繰り返されている。

自分の体験からネタを探す。自らの体験を基に実践例を入れると入れないのとでは、採点者を引き付ける

度合いが異なってくる。学習指導や生徒指導の課題では、教育実習や講師の仕事を通じて、子どもたちとの触れ合いから学んだことやボランティア活動で心に残ったことなど思い返してみよう(教員養成セミナー 2005, 9, p.47)。

面接ノートを作ろう。人間性を育てるためには、教育実習やボランティア活動に行ったときのことや、講師経験者なら子どもと接しているときのことなど、毎日の生活を送る中で、気が付いたこと、感動したことをノートに書き留めておくのが有効です。どんな小さなことでも構いません。書き込みの数が増えるにつれて、子どもを見る目が養われ、人間性を広げることにつながります。(中略)例えば、「ボランティア活動や教師として子どもと触れ合う中で、なかなかコミュニケーションが取れない子どもがいたけれど、周囲の人や先生にアドバイスをもらってやってみたら、うまくいった」という状況は、自分のステップアップにもつながります。こうして蓄積したものが、そのまま面接へ向けての資料になります(教員養成セミナー 2006, 12, p.55)。

要するに、2000年から2010年においては、「ネタ」としてのボランティア活動を行っており、「他人のため」のボランティア活動よりもむしろ、「自分のため」にボランティア活動をしていると言えるのである。

一方で、1995年の教えることに焦点が当てられた時代から、ただボランティア活動の経験をするのではなく、教育問題につなげたり、学校教育にどう生かすかを考えなければならぬという表現が少しずつ確認されていた。

たとえ、剣道三段の腕前であろうと、ボランティア活動で相手に感謝された体験があるからといっても、それは単なるあなたの特技や資格にすぎません。特技や趣味・経験をアピールするなら、それらを教育の現場で具体的にどう生かそうと考えているのかまで記述する必要があります(教員養成セミナー 2004, 6, p.69-70)。

#### 4-3. 教師として生かす「ボランティア活動」への発展(2011～2014)

2011年以降になると、教師として生かすためのボランティア活動へと発展した。その根拠として、2011年から、「自己分析」という言葉が特集され「ボランティア活動」と一緒に使われていることが挙げられる。例えば、自己分析とは、「本来、『自分がどのようになりたいか』という『未来』を考えるための分析」(教員養成セミナー 2012, 6, p.4)ということである。それに対して、多くの人が「自分はこんなことをしてきた」という「過去」ばかりに目を向けているという。そして、採用する側が

知りたいのは、「この人が教師になったら、どのように活躍してくれるのか」ということである。

自己分析が「大学時代に子どもと触れ合うボランティア活動をした」というような、過去を整理するだけのレベルにとどまっていたら、効果的な自己PRにつなげることができません。「そのボランティア活動から何を学び、教師の仕事でそれをどう生かすか」という、教師になった後のことまで目を向ける必要があるのです。過去を掘り下げることは、プロセスの1つにすぎません。自己分析においては、「自分のこの長所は教師の仕事で生かせる」「教師として必要な能力を補うために、今からこのような努力を始めよう」といった仕事目線になれるかどうかを合否を分けると言っても過言ではありません。過去の経験を教師の仕事でどう生かしていくのかという、未来を見据えた自己分析をしていきましょう(教員養成セミナー 2012, 6, p.4)。

背景には、教育委員会が出す「求める教師像」がある。「求める教師像」とは、1999年、教育職員養成審議会第三次答申「養成と採用・研修との連携の円滑化について」において、教員採用試験の透明化が求められることから提示されたものである。教員採用試験を透明化するにあたり、各県の「求める教師像」も明らかにしようということである。「教員養成セミナー」においても、2000年ごろから「求める教師像」が特集されはじめ、2010年から、都道府県情報として、「求める教師像」が提示されている。他方、布村によると、「求める教師像」の提示によって、選考方法の多様化による、様々な人材が教員になる可能性を拡大しようとする目的が弊害されているという。簡潔にいうと、教育委員会の多くが、「求める教師像」を提示することで、採用段階で共通の教員に資質を前提とした選考を行っているため、多面的な評価によって、より精選された一つの教員像の可能性を追究しようとしているとさえいえるというのである(布村 2013, 111-112)。要するに、多様な評価があるのにも関わらず、最終的には1つの教員像の可能性を追究しようとしていることから、「求める教師像」に合わせてボランティア活動が行われていると言えるのである。この変遷は、「ボランティア活動」をした上で、教師としての生かし方を考えなければ教師の資質能力があると判断されなくなったとも言える。要約すると、2011年以降は、「自分のための」のボランティア活動が、結果的に、「教師として生かす」という視点が入ることで子どものために、「他人のために」するボランティア活動になったと言える。しかし、結局は、「求める教師像」に沿う形でボランティア活動をしているのだから、「自分のため」にしているとも解釈できるのである。

## 5. まとめ

結論を言うと、1995年から1999年の教えることに焦点が当てられた「ボランティア活動」に、2000年には、ネタ作りのための「ボランティア活動」に、2011年から教師として生かす「ボランティア活動」に変わっていった。要するに、1995年においては、子どもに「教えること」に焦点が当てられ「他人のため」のボランティア活動だったが、2000年から「ネタ」という側面が出て、「他人のため」のボランティア活動が「自分のため」になり、2011年から「教師として生かす」という視点が出て、再び「他人のため」の側面が強くなったのである。しかし、2011年以降においては、「求める教師像」に即してボランティア活動をしている点においては、「自分のため」のボランティア活動が継続しているとも言えるのである。

加えて、「ボランティア活動」は教員の資質能力と大きく繋がっている。1999年までは、教員の資質能力は関係していなかったが、2000年から「ボランティア活動」をすることで、資質能力があると判断されるようになり、2011年からは、「ボランティア活動」にプラスして、教師としてどう生かすかを加えることで、資質能力をアピールすることができるようになったのである。簡潔に言うと、「ボランティア活動」が「ネタ」として求められ、教師として必要とされる背景には、「ボランティア活動」することで、教員の資質能力がつくと判断されるからである。

## 参考文献

- 「Amazon 学校教育雑誌」(<http://www.amazon.co.jp/gp/bestsellers/books/46510011>) 2015.1.30 閲覧。
- 中山淳夫, 2006, 『ボランティア社会の誕生——欺瞞を感じるからくり』株式会社三重大学出版会。
- 布村育子, 2013, 「教員採用システムの史的動向に関する考察」『埼玉学園大学紀要人間学部篇』13, pp.107-120。
- 柴田和子他, 2004, 「ボランティア活動の動機における自発性と外発性」『国際社会文化研究所紀要』6, pp.119-131。
- 「時事通信社出版局 教員養成セミナー」(<http://book.iji.com/kyouin/seminar/>) 2015.1.30 閲覧。
- 一言説分析資料—
- 時事通信社編, 『教員養成セミナー』vol.17no.4~vol.37no.6(1995. 4~2014. 6)
- 統計データ—
- 独立行政法人日本学生支援機構, 2006, 『学生ボランティア活動に関する調査報告書』
- 文部科学省, 『教育委員会月報』no.546~no.774(1995. 11~2014. 3)。
- 総務省, 2006, 『平成18年社会生活基本調査』